

原爆文学研究会報

第六十六号

原爆文学研究会 二〇二二年九月

「ファッキング・ウエザー」を謳って

後山 剛毅

「雲一つない晴れた朝、空から死が降ってきて、世界は一変した」と述べたのは、アメリカの大統領だったか。現職大統領が漏らしたはじまりの言葉は、さまざまな解釈と意見の相違を生んだ。空に「ピカッ」という文字による切れ目が見て取れたのは、十年以上前のことだったか。黒色火薬がシンのボルの背景に爆音とともに舞って、あたりは独特の硝煙の匂いに包まれた。その翌日だったか。

空はひとつというクリシェと裏腹に、空にはいつも切れ目が見てとれる。夏が巡ってくる、ヒロシマの記憶にまつわる「美しい言葉や念想が殆ど絶え間なく流れてゆく」。

広島出身の詩人で作家の原民喜（一九〇五—一九五二）は、自分自身を「杞憂亭」あるいは「杞憂」と号していた。空がふたつに割れて世界が崩壊するという「杞憂」は、無数の偶然と最後にボタンを押した「人の指」によって、現実のものとなってしまった。原が戦前に「轢死」を主題とした「溺没」に次のようにある。

胴の上、赤と緑のシグナルが瞬く闇に、涼風の窓を列らねた省線が走り、その女の靴の踵が、轢死した彼の上を通過している。

洋裁を習って、二人の妹を養わねばならぬと、その女の踵。

ガラガラとミシンは回転し、女の踵は猛夫の額を踏み、踏む。

ああ、それも、これも、背き去らねばならぬ衰運の児のさだめか。再び、彼の頭上を省線は横切り、無用の頭蓋を粉碎してしまう。

線路に横たわる猛夫を死に追いやるのは、レールの上を走る電車ではない。その電車に乗って、家族を養うために、機械と同一化して稼ぎを得ようとする女の靴の踵なのだ。女の靴の踵はペダルを踏むようにして、猛夫の頭骨を踏みつけ粉碎する。

ボタンを押すこと、ペダルを踏むこと。そのようなボタンを押してしまふ人々の滑稽さをアイロニカルに描き出したペトル・ゼレンカ（一九六七）の『クノフリカージ』（一九九七）は、ヒロシマに原爆を投下した搭乗員を描いて、当然のようにそれを茶化す^三。冒頭、ふたつの場面が並行して画面に映し出される。ひとつは原爆投下に向かうB29搭乗員の会話、もうひとつは大雨の小倉でアメリカ帰りの男を迎えた家族の会話だ。アメリカ帰りの男を快く思わない少年は、男に食ってかかる。男の方も、罵倒語のひとつも言えないようでは、戦争には勝てないと煽る。この振り仕切る豪雨とジメジメとした日本の夏を呪ってみよ、と。

「ゴッダム・デイス・ファッキング・ウエザー」
男のノリに合わせて、家族も繰り返す。「ファッキング・ウエザー」
「ファッキング・ウエザー」小倉に向かっていた機

体に無線が入る。小倉は天候不良で第二目標の広島に向かうように指令が下る。搭乗員たちは、罵倒語を口にしながら、広島へ向かい、爆弾投下のボタンを押す^四。

呪われた空がもたらした幸運と、不幸。やはり空はふたつにわれているのだろう。そんなことを入道雲が轟々と音を立てる衣笠山の麓で書いている^四。今年には梅雨が続かず、「戻り梅雨」という聞き慣れないフレーズが聞こえてきた。世界は今年も異常気象。「ゴッダム・デイス・ファツキング・ウエザー」。

京都の空も呪われていた。原爆の最初の投下目標は、京都だった。今年も「京都の夏」がやってきた。盆地特有の湿気と高温。真夏に雪は降らないものだろうか。宇多天皇（八六七〜九三一）の故事にならって、真夏の雪を祈念する。「ゴッダム・デイス・ファツキング・ウエザー」。

共同研究室でパソコンを打っていると、ドアが開いて後輩が入ってきた。

「今日、外めちやくちや暑いですよ。来るときに夕立には遭うし。湿気でむせ返りそうなのに、なんで冷房ついてないんですか？」

「そのうち真夏に雪が降るよ。」

「それ、異常気象じゃないですか。」

後輩が空調のスイッチを入れた。

ゴッダム・デイス・ファツキング・ウエザー。

脚注

一、原民喜、「鎮魂歌」一九四九年。引用は、『定本 原民喜全集』第二巻、一〇七頁（青土社、一九七三年）。

二、原民喜、「溺没」一九三九年。引用は、『定本 原民喜全集』第一巻、二四五〜二四六頁（青土社、一九七三年）。

三、ペトル・ゼレンカの『クノフリカージ』について、日本では受け入れられない原爆体験の風刺を試みた作品と紹介した論考がある。デイック・ステゲウエルンス、「距離・制限・タブー」日欧「ヒロシマ」イメージの隔絶」福岡良明、山口誠、吉村和馬編『複数のヒロシマ』記憶の戦後史とメディアの力学』青弓社、二〇一二年、三一一〜三二四頁。

四、ゼレンカの『クノフリカージ』が公開された同年に、アメリカではB 29ボックス・カーの機長であったチャールズ・W・スウィーニー（一九一九〜二〇〇四）が、『War's End: An Eyewitness Account of America's Last Atomic Mission』（邦訳は『私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した』）を発表し、原爆投下に関しての議論が盛り上がっていた時期である。『クノフリカージ』では、小倉への原爆投下を諦めたB 29は、広島に向かうが、実際には、小倉は第二投下目標であり、一九四五年八月九日に視界不良のため原爆投下を免れた。スウィーニーが操るボックス・カーは長崎へと向かった。

五、鹿苑寺金閣の背景にそびえる標高二〇一メートルの「衣笠山」の名称は、その昔、宇多天皇の時代に、真夏にも雪景色を見たいと切望した天皇の命に依って、衣笠山に白絹をかけたことに由来する。

第六十六回 原爆文学研究会報告

二〇二二年六月二十五日（土）第六十六回研究会を開催しました。第二期最初の研究会となる第六十六回は新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、広島大学東千田未来創生センターを会場とした対面とオンライン会議システムを利用した遠隔中継のハイブリッド形式を採用しました。研究会は村上美奈子さんによる研究発表「城山小学校の殉難児童を捜して」と川口隆行さんの新著『広島 抗いの詩学―原爆文学と戦後文化運動―』の合評会の二部構成でした。

村上美奈子さんの研究発表では原爆投下により長崎市内の城山国民学校で亡くなった殉難児童についての痕跡を辿る報告がなされました。昭和五〇年代以降にまとめられた殉難児童名簿をもとに当時の様子を紐解く試みに、会場参加者からも新たな視点を与えるコメントや質問が盛んになされました。

後半の合評会は二〇二二年二月に琥珀書房から刊行された川口隆行さんの新著『広島 抗いの詩学―原爆文学と戦後文化運動―』を対象テクストに宇野田尚哉さん、佐藤泉さん、成田龍一さんの三名を迎えて行われました。会場から、オンラインから、多岐にわたるコメントがなされ、本書が読む者のこれまでの「原爆文学」への眼差しを露にする強い力をもつ書であること感じた方も多かったように思います。合評会の様子については加島正浩さんから印象記を寄稿いただきました。参加できなかった会員の皆様にも当日の様子を感じ取っていただければと思います。

◇ 研究発表

城山国民学校の殉難児童を捜して

村上美奈子

本報告では、長崎の浦上に投下された原爆によって千四百名もの子どもたちが亡くなったとされる城山国民学校の、その一人一人について、昭和五十年代以降になってまとめられた殉難児童名簿を手がかりにしなから、その痕跡をたどっていく試みについて発表しました。

広島原爆では、国民学校の三年生から六年生は学童疎開をされていて、孤児になってしまった子どもたちも多かったが、長崎では、そのような形での疎開は行われていなかったため、各国民学校に千四百名や千五百名もの児童が在籍していたその時代、長崎の爆心地近くの城山国民学校でも山里国民学校でも、千三百人を超える児童が犠牲になったといわれている、正確な犠牲者数は分からない。

山里小学校では、毎年六月と十一月と二月に「平和週間」があり、熱心に平和教育に取り組み続けており、また、城山小学校も、昭和二十六年八月八日以来、コロナ禍の昨今も含めて毎月九日に「平和祈念式」を続けていて、二〇二二年六月九日で第八五一回を数えている。

山里小学校では、児童名簿は防空壕にあったので残っているが、城山小学校では当時の名簿は焼けてしまっていて、殉難児童名簿に名前が載っているのは八六一名である。戦後七十七年が過ぎて、その名簿に名前がある児童についても、名前が載っていない児童についても、手がかりをつかむことは困難を極める。しかし、原爆投下の直前に疎開して助かった人たちは、これまで被爆を免れたとして体験を公にしてこなかった場合が多いが、改めてお話を伺ったり、それぞれがまとめられた地図や資料を見せていただいたりすると、在りし日の城山学区の友だちや地域の姿、様々な思い出が浮かび上がってくる。このような調査には、ま

だ着手し始めたばかりではあるが、今回発表をさせていただいて、これまでの成果をまとめて会場内外のいろんな方にお伝えすることで、新たな手がかりや視点を得ることにつながった。

例えば、中村平さんが指摘くださった朝鮮出身の住民については、当時の復元地図を見直すと、城山小学校のすぐ下に朝鮮人飯場があったことが分かり、その場所をめぐる記憶や証言の一つ一つが当時の状況を知る貴重な手がかりになっている。また、慰労会の後に川口隆行さんに教えていただいた、広島県翠町中学校での、坪井直さんが教頭をしていた時代以来の実践である「空白の学籍簿」をめぐる学習については、同校卒業生の児童文学作家である中澤晶子さんに八月下旬にお会いして、お話を伺ったり、資料をお借りしたりすることができた。他にもたくさんの方から、普段のご自身の研究ならではの視点から様々なことを教えていただいて、この機会をいただけたことに大いに感謝している。城山小学校の当時の子どもたちに関わるような記述がある手記等をご存知でしたら、今後もお知らせいただければと思います。

◇合評会印象記

加島 正浩

第六十六回原爆文学研究会で行われた川口隆行氏の著作『広島抗いの詩学―原爆文学と戦後文化運動―』の合評会では、多岐に亘る論点が提示され、議論が白熱した。その全てを報告することは私の能力では到底叶わないため、私の興味関心に基づく整理で恐縮だが、その一端を報告することで、印象記に代えたい。

まず、動物や非人間の側から「人間であることの責任」を問い直している点が、本書の特徴のひとつであり、その「責任」を問うことが、原爆文学の核心にあるのではないかという論点が挙げられた。その論点は、

本書が問題としている一九五〇年代が運動（イデオロギー）の時代であるということとも関連していた。上からイデオロギーが「注入」され、立ち上がってしまう「主体」を問い直す要因として、動物などへの着眼がなされているという指摘であったと、私は理解した。

一九五〇年代がイデオロギーの時代であったことを踏まえた本書の意義は、他にも示された。運動における表現は、運動のイデオロギーの定型に表現をはめていく側面もある。その定型から漏れ出る「表現」をすくい上げる仕事でもあるという指摘が、示された意義のひとつである。本書はその「表現」から、運動のイデオロギーや「国際平和都市の論理」が覆い隠そうとする、声になりえない人々の情念や沈黙、死者の存在を読み取る試みでもあると評されていた。

この「定型」と表現という問題は、「原爆文学」の問題としても議論された。「原爆文学」という問題領域が固定化（中心化／定型化）することなしには、公に問題領域が認識されるのは難しい。しかし、固定化に抗う動きもなされなければ、定型から漏れ出してしまう問題もある。そのため「文学」を書く側のみならず、読む側においても「原爆文学」という定型からいかに逃れながら読みを展開するかという問題が生じるわけである。

このような書くこと・読むことをめぐる定型化から逃れるためにも、運動で生まれた表現Ⅱエクリチュールを本書は掬いあげ解釈を行っているわけだが、運動で生まれる大半の詩は新たな解釈を生み出すことが難しいという課題も提起された。その議論においては、解釈ができない詩であるとして研究の埒外に追いやるのではなく、そのような詩が多く書かれた〈場〉を問うことで、人々がそのような詩を書くことで何を託していたのかを明らかにすることが重要なのではないかという問題提起もなされた。

私見だが、近年フランコ・モレッティの〈遠読〉や、ホイット・ロングの『*The Values in Numbers*』など、計量分析の手法を用いた文学研究の

方法論が確立しつつある。計量分析は、類型化した表現を特定するのに適した分析方法であり、そのような方法を用いることで、五〇年代のサークル運動で生み出された表現を、解釈とは異なる形で、研究の俎上に挙げることは可能であるように感じた。川口氏の著作の優れた達成を明確にするのみならず、今後の研究者が引き受ける課題も提示された本合評会は、大変実りの多いものだったと思う。

彙報

第六十六回 原爆文学研究会

○日時 二〇二二年六月二十五日（土）

○会場 広島大学東千田未来創生センターM204

※ウェブ会議システムを利用したハイブリッド形式での開催

○研究発表

城山国民学校の殉難児童を捜して

村上美奈子

○合評会…川口隆行『広島抗いの詩学―原爆文学と戦後文化運動―』

書評者…宇野田尚哉・佐藤泉・成田龍一

編集後記

二〇二二年六月の第六十六回の研究会開催の後、日本は全国的な酷暑を迎え、大変な暑さの中をマスク姿で過ごす夏も三年目となりました。二〇二二年十二月の第六十五回研究会で第一期の活動を終了した本会は、八月の二〇二二年から第二期として活動を継続しています。研究会の名前

や会報発行については従来のを踏襲しつつ、世話人会ではそれぞれの生活と両立しながら新たな体制での運営を模索しているところです。第二期世話人は以下の十一人のメンバーです。事務局は第一期から継続して中野和典さんが引き受けてくれています。代表世話人は設けずに、全員で企画運営をし、機関紙編集と会報編集は役割分担を行っております。

後山剛毅

加島正浩

榎本由貴

楠田剛士

中尾麻伊香

中野和典

長野秀樹

松永京子

野坂昭雄

堀本嘉子

山本昭宏

私事ではありますが、新しい家族を迎え、研究会に参加し始めた当初とは違う生活環境になり遠方の研究会へ身軽に足を運べる身ではなくなりました。日々の生活に追われ、読むということに向き合う時間がなくなっていることも自覚しています。それでもこのように研究会の末端に加えていただき、考えることを続けられているのはひとえに世話人会の皆さんと会員の皆さんの心があるからと感謝の念が絶えません。研究会の活動を起点として会員の皆様の報告や応答に刺激を受けながら、改めて読むことに向き合い、研究会を重ね、お互いの未来を拓いていけたらと思います。最後になりましたが、研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

（堀本 嘉子）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八―一九―一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631

URL <http://www.genbunken.net/>